インタビュー②

夢は叶うもの。叶うものと思い続けるもの

「心の宅急便」主宰 ヒロコ・ムトー

七十歳で絵を始め、八十八歳で豆紙人形作家としてデビュー、国内外で注目を浴びた故マサコ・ムトーさん。講演などを通して、その前向きな生き方と人間の可能性を伝え続けるご息女のヒロコさんに、お母様が残した言葉を交えつつ、その人生を振り返っていただいた。

八十八歳で豆紙人形作家に

――四月にはお母様の出身地・北九州市で生誕百年を記念する作品展が二か月半開かれたそうですね。

ムトー　ええ。それまで全くご縁のなかった方が、無名の母の作品に感動し、十年間企画を温め実現してくださったんです。七十歳でパステル画を習い始めた母の人生が花開いたのは八十代、九十代でしたけれども、今回、故郷で母の絵や豆紙人形を集めた作品展が開かれたことで、「人生ではこういう奇跡が起こることもあるんだな」とあらためて思いました。

――来場者の反応はどうでしたか。

ムトー　とても感動してくださいました。特に和紙や綿棒を使った豆紙人形は母が八十八歳から取り組み始めたものなんです。片目の見えない母が、手のひらにのる高さ三～五㌢の人形を繊細に仕上げて、しかも鵜飼い、茶摘み、舞妓など日本の四季折々の風物を表現していったわけですから、それはびっくりされていて……。

――お母様の作品を拝見しましたが、素晴らしいできでした。

ムトー　母はいつも「私の指が目なのです」と笑っていました。実際、母は物差しで線を引くことを一切しないんです。下書きもなし。いきなり和紙にチョキンとハサミを入れる(笑)。

――それでこれだけの作品を。

ムトー　母の頭の中には、作る前からすでに完成された人形ができあがっていたようです。切った紙の大きさもまちまちなので、どうなるんだろうと横で見ていると、それこそ立たせてみてバランスが悪かったら座らせるとか、自由自在なんです。こうやって九十三歳で亡くなるまでの六年間に約三百点の豆紙人形を創作しました。

豆紙人形展は母の生前から今日まで国内だけでなく海外でも開かれてきました。特に二〇〇四年のパリでの作品展は好評でした。海外での展示は娘の私の念願でもありましたが、五分間ということでお見えになった駐仏日本大使の平林博さんが一時間近くも食い入るように作品をご覧になったり、平林さんのご縁でシラク大統領に作品(相撲人形)をお届けできたり、とても大きな反響を呼びました。

翌年にはパリの日本文化会館でアンコール展が開催され、母が亡くなった翌年の二〇〇七年には追悼展も開かれたんです。

――豆紙人形作家として国内外で知られるようになったのですね。

ムトー　母は心に響く素晴らしい言葉を日記や画帳にたくさん残していて、私はそれを『マサコおばあちゃんの名言集』(海竜社)として纏めたのですが、その中に、

「夢は叶うもの　叶うものと思い続けるもの

とあります。自分が芸術家になるなど考えてもいなかった母ですが、期せずして晩年、その夢を叶えてしまいました。この言葉はいまの私の心の支えでもあるんです。

物言わぬ馬鹿におなりなさい

――お母様は七十歳までは普通の主婦だったと聞いています。

ムトー　そうですね。七十歳で絵を学びに行かなかったら、おそらく普通のおばあちゃんで人生を終えていたと思います。

母の人生を少しご紹介させていただくと、やはり敬虔なクリスチャンであったことが、いろいろなことの原点になっているように思います。母は大正二年に北九州の材木商の家に生まれて、下関にあるミッションスクールを卒業しました。教師の半数以上は外国人で、海外の自由な空気を吸収しながら学生生活を送ったようですね。

ところが、多分にやんちゃなところもあって「このままではお嫁に出せない」と心配した母親が親戚の家に修業に出させる。その家では叔母が病にかかっていましたので、母は乳飲み子から十三歳までの子を叔母の代わりに育て上げました。そして、親が決めた男性と形ばかりのお見合いをして嫁いでいくんです。

――そういう時代だったのですね。

ムトー　鉱山技師だった私の父は松山藩の家老の血を引いていたこともあって、よく言えばとても男っぽい人。半面、気位は高くワンマンで、「こらっ」と睨まれると、家族は体がすくんでそこから何も言えなくなる。母に許された自由は週に一回、日曜日に教会に礼拝に行くことだけでした。

夫婦の会話は五十年間「はい」「そうですか」「そうですね」の三言だけ。母は父からどんなに理不尽なことを言われても「でも」とか「いいえ」と口答えしたことが一度もなかったといいます。というのも、母は結婚する時、お姑さんに「この家の嫁になるならば物言わぬ馬鹿におなりなさい」と言われて、それを五十年間守り通すんですね。「私は馬鹿やったからね。馬鹿でいいんだったら楽やなと思って嫁に来たんよ」と私には笑って話していましたけれども。

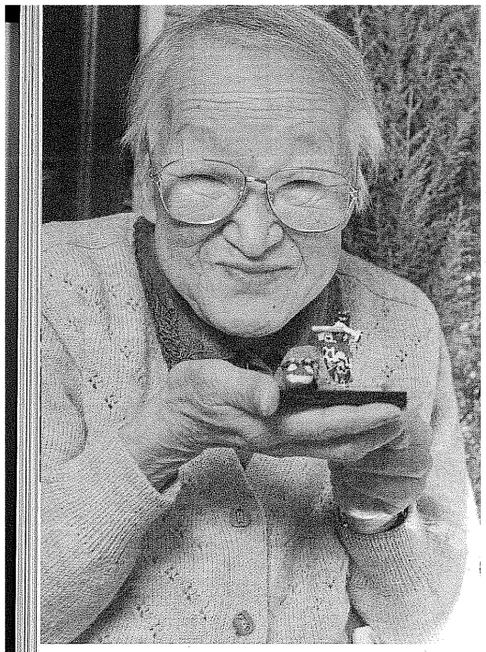
それで私は小さい頃、結婚ほど理不尽なものはないとずっと思い続けていました。

――お母様の苦労を身近で見てこられた。

ムトー　父は優秀な姉兄に比べて不出来な私に辛く当たることがありました。なぜそういう目に遭うのかが子供の頃は分からなくて苦しみました。そういう時、母は必ず父親のいないところで「ヒロコは悪くない。お父さんを許してあげてね。いつかヒロコのいいところを分かってくれるから」と、数少ない私の長所を褒めて励ましては抱きしめて泣いてくれました。

――優しい方だったのですね。

ムトー　本当に誰に対しても優しかったと思います。随分昔のことですが、ご近所に顔に腫れ物ができた知的障碍の女性がいらっしゃいましてね。誰も近寄りたがらないんだけど、母親は「遊びにおい



マサコ・ムトー
大正2年福岡県旧門司市(現・北九州市)生まれ。70歳の手習いでパステル画を始め、76歳で初めての個展。88歳より手のひらに乗るような豆紙人形を制作。その作品は中国、アメリカ、フランスと海外でも絶賛される。平成18年93歳で逝去。主著に『マサコおばあちゃんの名言集』『雲日記』(いずれも海竜社)。

ヒロコ・ムトー――昭和20年秋田県生まれ。青山学院大学仏文科卒業。TBSテレビタイムキーパーを経て作詞家に。ミュージカル原作・脚本・作詞、エッセイなど広い分野で活躍。平成19年よりいじめ防止や克服を呼びかける朗読講演「心の宅急便」を行う。主著に『一度しかない人生だから』(海竜社)。

ありし日のマサコ・ムトーさん（左）とヒロコさん
（写真提供＝産経新聞社）

で」と招き入れたり、「ちょっとお使いに行ってくれるかな」と近くの八百屋に買い物に行かせてお駄賃をあげたりして、なんら分け隔てすることなく接していました。

母は戦争中の怪我で片足が曲がらなくなっていたんです。ですから、人の痛みや苦しみに敏感だったんでしょう。そういう母を持ったことは私の大きな誇りです。

諦めは弱さと人生の敗北

――お母様が絵を学び始められたきっかけがあったのですか。

ムトー 六十九歳の時に夫を亡くし、見送った一年後、藤沢（神奈川県）のカルチャーセンターに通い始めました。いま思うと、ずっと前からパステル画を習いたいとは思っていたのでしょうが、そういう素振りは見せませんでした。洋裁でも編み物でもなんでも器用な人でしたから、才能があったのか、三年後から三年続けて藤沢市展に入選したんです。私たち家族の勧めもあって七十六歳と八十三歳の時には個展も開きました。

――喜ばれたでしょう？

ムトー だけど、その頃、母は大変な時期でした。肺も腎臓も心臓も大腸も骨も、体の至る所がボロボロで、時には弱った臓器が一斉に悲鳴を上げ始めて救急車で運ばれることもありました。そして八十九歳の時には大腸がんが見つかって大手術をしたんです。

母は声も小さくとても控えめな性格ですが、誰かに弱音を吐くことはしない人でした。人の痛みは本人が言わない限り外からは分からないものですが、病状を思えば人の何倍もの痛みや辛さがあったのは間違いありません。

母の残した言葉があります。

「悪口を言うと十倍利子がついて返ってきます。払えないので言いません」

「大したことじゃない！ 大したことじゃない！ 大したことじゃない！ 三度唱えれば大抵のことはそうなります」

「たいせつな涙はうれしい時にとっておきませう」

「諦めは弱さと人生の敗北です」

――気丈な一面をお持ちだった。

ムトー これは母の死後に分かったのですが、母はその苦しい闘病生活の中で「雲日記」というものを描いていました。ベッドから見える空の色や雲の変化をはがきサイズの用紙に水彩でスケッチしたものですが、刻一刻と変わる景色の一瞬を捉えたタッチは見事でしたね。一つひとつには「西の空が火のように赤く、特に空の雲の早い光の変化の素晴らしさに思わず描きました」などと説明が添えられていますが、絵も言葉も希望に満ちて、病気の痛みや苦しさは微塵も感じられなかったんです。

――豆紙人形との出合いはどういうものでしたか。

ムトー いくら前向きと言っても八十八歳のその頃は緑内障で片目を失明していて、見えるほうも人工水晶体が次第に衰えていました。加えて大病でしょう。「おばあちゃん、頑張ってください」という周囲の励ましに母は「気持ちはあっても大きな絵は描けません。皆さんには申し訳ありません」とお答えしていました。

でも母はそんな自分でもできることはないかと常に考えていたんです。ある時そのことを相談された私は、母が教会の子供たちに配っていた小さな人形のことを思い出しました。励ましたい一心で「お母さん、これを作ったらどうだろう。自分が生きた時代を豆紙人形で表現したら、きっと喜ばれると思う」と言ったんです。

二週間くらいした頃でしょうか。「ヒロコ、ちょっと作ってみたんだけど見に来て」と言われて、見たら驚きましたね。一月の出初め式から十二月の大掃除まで、節分、花祭り、端午の節句、七夕、お月見、甘酒売りといった大正時代の行事や風景が豆紙人形で表現されていたんです。あの目の不自由な母が、よくここまで、と思うと感動で胸がいっぱいになりました。

一夏で七十七点作り、九月の豆紙人形の個展には毎日驚くほどたくさんの人が足を運んでくださいましたが、その中の一人が「なんて素敵で可愛くて温かい作品なんだろう。僕のお店であなたの作品を一か月飾らせてもらえませんか」と母に声を掛けられたんです。驚いたことに、その方は全日本紙人形協会会長でお茶の水にあるおりがみ会館の館長・小林一夫さんでした。母の豆紙人形はプロの第一人者に高く評価されたわけです。平凡な主婦として生きた母が新豆紙人形作家マサコ・ムトーとして認められた瞬間でしたね。

母はこんな言葉を残しています。

「片目しか見えませんが、見えない目が見せてくれるものが沢山あるのです」

「身体はすっかりおばあちゃんになりましたが、まだ手が動きます。指が動きます。絵が描けます。なんて幸せなんでしょう」

「八十七歳 いつも夢を追っています。創造している夢を実現したいです」

マサコ・ムトーさんの豆紙人形。手のひらにのるサイズだが、つくりは繊細

母の思いを受け継いで

――どの言葉も希望と感謝に溢れていますね。

ムトー 母には人形を作って誰かに評価されたいとか、有名になりたいという野心は微塵もありませんでした。たぶん自分に残された時間を考えながら一点一点心を込めて作ったのだと思います。傍で見ていると、目が覚めた瞬間から「きょうは何を作ろうか」とワクワクと創作意欲を燃やしている様子が伝わってきました。

晩年は入退院の繰り返しでしたけれども、九十三歳の時「ハサミが使えなくなった」と悲しそうに言ったんです。これが最後の言葉でした。その頃は一粒の錠剤をハサミで半分にしないと喉を通らない状態でしたが、母はこの薬を半分にする作業を亡くなる寸前までやっていたんですね。

――そういうお母様の生き方を思うと、人間は最後まで前進を続けていかなくてはいけないという思いを強くします。

ムトー そのとおりですね。私は若い頃、作詞や子供ミュージカルの脚本の仕事をしていました。六十歳で仕事に一区切りつけようと人生計画を立てて、実際そうしましたし、母の作品展についてもパリの追悼展を最後にすべての活動を終えるつもりでした。現実問題として自費で海外で作品展を続けるのは経済的に相当無理がありましたからね。だけど、そこで止まってはいけないと気づかせてくれたのがやはり母だったんです。

――亡くなったお母様が。

ムトー 母が亡くなった翌年の二〇〇七年、私を支えてくれた仲間とともに追悼展をやるためにパリに行き、おかげさまで三か所の展示会は大成功でした。だけど、帰りの飛行機の中でふと思ったんです。作品展を開くには持てる力をすべて出して私を支えてくれた人たちがいた。見返りや結果を求めず時間と労力を提供してくれた人がいた。では私はその人たちのために何をしてきたのだろう。助けてもらうだけで何もしてあげられていないじゃないかと。

そこで始めたのが「心の宅急便」という朗読講演です。いま私は小学校や中学校、高校を回って朗読や講演を行い、必ず二つのことを伝えています。一つは私の娘が体験したいじめの悲しさとそれを乗り越える方法、そしてもう一つが母のことです。人間、いくつになっても遅すぎることはない。どんな状況の中でもやれることがあることを母の姿を通して訴えているんです。

母は亡くなりましたけれども、私が活動を続ける中でその人生と言葉は生き続けています。母は私にメッセンジャーの役割を与えたのかもしれません。

――それがムトーさんの使命だと。

ムトー 私はいまも壁にぶつかった時、いつも母の言葉を思い出しています。

「今が始まり今日が始まり、今日を悔いなく生きていれば何があっても怖くない」

「失敗なんて大したことはありません。失敗くらいで死にませんから」

「夢と希望は生きる力です」

このような前向きな言葉を使い続けることで人生は大きく花開くのでしょうし、母が生き方を通してそれを教えてくれたように思います。